

コムギ赤かび病の防除を徹底しましょう！

赤かび病菌は、小麦、大麦、トウモロコシなど多くのイネ科の穀物に感染します。麦類では主に5月中下旬の開花期に感染し、屑粒が多発して収量が減少するほか、かび毒の一種、デオキシニバレノール（DON）等を生成することが知られています。

このため、検査規格の中に赤かび粒の混入許容値が定められており、本病が発生すると、販売や流通の大きな障害となります。

【発生しやすい条件】

★出穂前後から乳熟期にかけて曇天・小雨が続き、温度が高い場合に多発します。

開花期の降雨・高温（25℃程度）で感染の危険性大

★過剰な窒素追肥を行うと遅発分げつが発生し、開花が長引くため、感染期間が長期化します（長期間の防除が必要となります）。

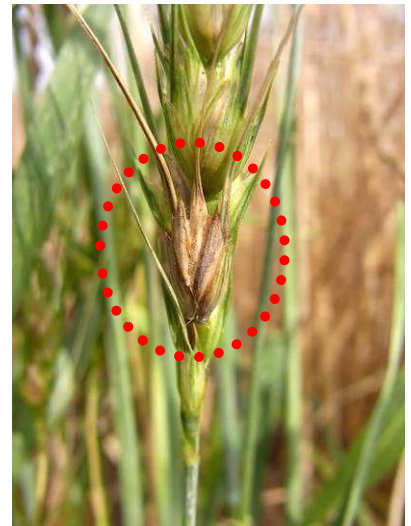
★倒伏、凍霜害による不稔の発生は感染を助長します。

「令和3年度にコムギ赤かび病が多発した要因」

出穂・開花期は、平年より数日～10日程度進みましたが、全県で発生した凍霜害のために不齊一となった地域もありました。

感染しやすい時期である開花期～2週間後が5月中下旬となり、この時期の気温と降雨が感染に適した条件となりました。特に5月16日～18日、21日に県内広域で感染好適条件がそろってしまいました。

このため、全県で発病穂が多くみられました。



赤丸内（褐変している部位）が赤かび病感染部位

【薬剤防除のポイント】

★適期に防除します。（出穂期に降雨が続く場合は特に注意）

〈防除時期：開花始期～開花盛期（出穂期後7～10日頃）〉

★降雨等天候不順がさらに続く場合は追加防除が必要です。

〈追加防除：1回目防除の10～14日後〉

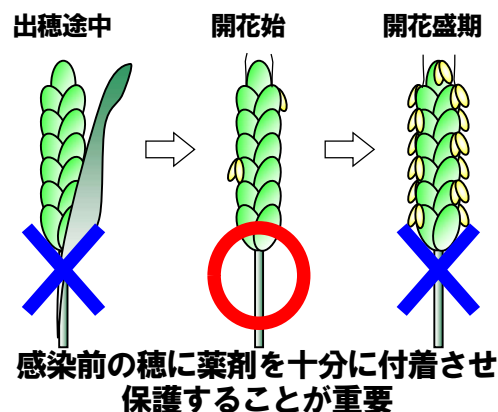
注）使用農薬についてはJA、農業農村支援センターにお問い合わせください。また、農薬を使用する際は、農薬使用基準を確認の上、適正に使用してください。

【収穫・調製時の注意事項】

★赤かび病が発生したほ場では、刈分けを行い、健全な麦に混入させないようにしましょう。

★収穫後、高水分のまま放置すると貯蔵中に赤かび病菌が増殖します。収穫したら速やかに乾燥作業に移行してください。

○1回目の薬剤散布時期



【収穫の前に】

- ★ 赤かび病は高温多湿条件で発病が助長されるので、天候等の状況から赤かび病の発生が懸念される場合は、黄熟期前にほ場を見回り、発生の有無を確認しましょう。
- ★ 赤かび病の疑いがある場合、または赤かび病の感染を確認したら、JA、または農業農村支援センターに連絡し、必ず発生状況確認・刈り分け対応等の事後対策を実施しましょう。

【参考】 長野県におけるコムギ赤かび病の発生面積の推移
(長野県病害虫防除所発行 農作物病害虫発生予察事業年報より)

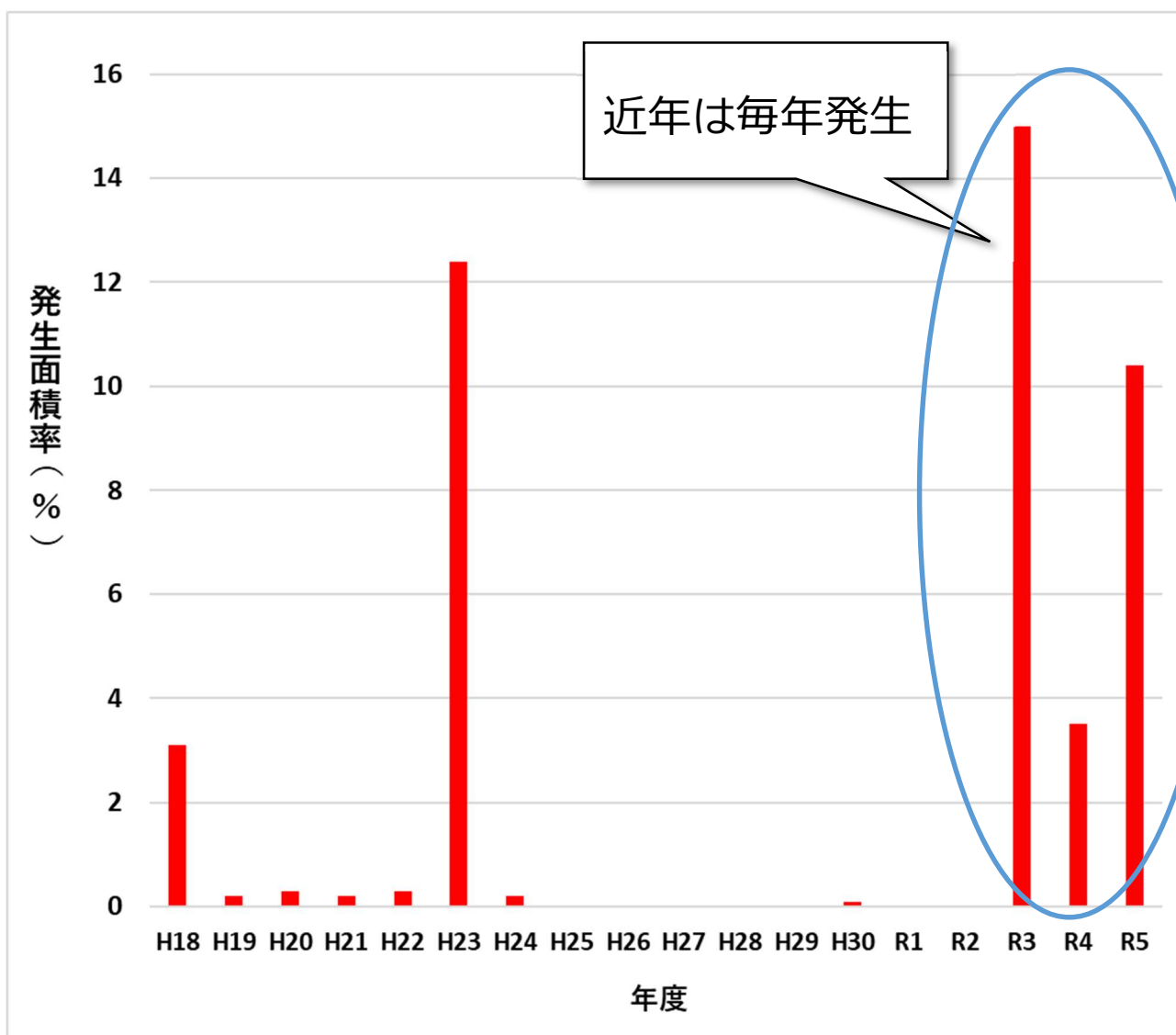


図 麦類赤かび病の発生面積率

詳しくは、最寄りのJAまたは、
農業農村支援センターへお問い合わせください。